

[21] 嘔吐

嘔吐は、胃の和降が失調し、胃気が上逆して起こる病の一症状である。したがってどのような病変でも、胃に損傷がある場合には嘔吐が起こる。先人は、吐物があり吐くときに声が出るものを嘔といい、吐物があり声が出ないものを吐といい、吐物がなく声だけが出るものを乾嘔と呼んだ。しかし実際には、嘔と吐は同時に発生して明確に区別することは難しいので、一般的に嘔吐と併称する。嘔吐と乾嘔は異なる症状であるが、ほぼ同様の弁証治療を行うことができるので、ここでは一緒に論じることとする。

『素問』には「寒気が腸胃に侵入すると、厥逆の気が上行するので、痛みが出て嘔吐する（寒気客於腸胃，厥逆上出，故痛而嘔也）」（挙痛論篇）、「抑えつけられた火気が反発するときは、人々に嘔逆を起こさせる（火鬱之發，……民病……嘔逆）」（六元正紀大論篇）、「太陰・湿土の気が報復すれば、湿気による異変が大いに発生し、……飲食物は消化せず、……嘔吐し、気が塞がって黙り込み、透明な唾を吐き（太陰之復，湿変乃拳，……飲食不化，……嘔而密黙，唾吐清液）」（至真要大論篇）、「食べると吐くという病状は、食物が多すぎて消化されず、胃中が充満して上に溢れて吐くのである（所謂食則嘔者，物盛満而上逆，故嘔也）」（脈解篇）などのような記載がみられる。また『靈樞』四時気篇にも、「邪気が胆にあって、胃に逆行すると、胆液が溢れるため、口に苦みが生じ、胃気が上逆するため、苦水を嘔吐する（邪在胆，逆在胃，胆液泄，則口苦，胃気逆，則嘔苦）」という記載がある。これらの点から嘔吐は寒気・火熱・湿濁・飲食および胆気犯胃などによって起こると考えられていたことがわかる。『金匱要略』で

は、嘔吐の脈証や治療について詳しく述べられており、今日でも用いられている有効な方剤がいくつか提示されている。さらに嘔吐も場合によっては人体が胃中の有害物質を排出するための防御反応なので、このようなときには嘔吐を止めてはならないという認識もあった。例えば『金匱要略』嘔吐噦下利病篇では、「嘔家で癰膿があるときは、嘔を治療してはならない。膿が出きってしまえば、嘔は自然に治癒するからである（夫嘔家有癰膿，不可治嘔，膿尽自愈）」と述べており、同・黄疸篇では、「酒疸で、心中に熱感があり、吐き気のする者は、吐けば治癒する（酒疸，心中熱，欲嘔者，吐之愈）」と記している。また『直指方』嘔吐篇では、嘔吐には胃寒・胃熱・痰水・宿食・膿血・気攻の証型があり、いわゆる風邪入胃とは異なると述べている。

病因病機

胃は水穀の受納と腐熟を主り、胃気は降を主り、下行が順である。もし邪気が胃を犯したり胃虚のために和降が失調すると、胃気が上逆して嘔吐が起こる。『聖濟総録』嘔吐篇では、「嘔吐は、胃気が上逆して下降しないために起こるものである」と述べている。嘔吐を引き起こす原因には、以下の四つがある。

① 外邪侵襲

風・寒・暑・湿の邪および穢濁ちびだくの気が胃腑を犯すと、胃の和降が失調して水穀が気とともに上逆し、嘔吐が起こる。『古今医統』嘔吐噦門に「急な嘔吐は、邪気が胃腑に侵入したことによるものであろう。長夏には暑邪が、秋冬には風寒の邪が犯す」と述べているとお

りである。

② 飲食不節

飲食過多、あるいは生もの・冷たいもの・脂っこいものや不潔な食べものなどを多く摂取すると、胃を損ない脾の働きを停滞させるため、食物の消化が損なわれ胃気が下行できなくなり、上逆して嘔吐が起こる。

③ 情志失調

悩みや怒りが肝を損なうと、肝は条達の性質を失い、横逆して胃を犯すため、胃気が上逆する。また憂思が脾を損なうと、脾の健運が失なわれるため、食べものの消化が損なわれ、胃の和降が失調する。これらはいずれも嘔吐を引き起こす。

④ 脾胃虚弱

過労により中気が損なわれたり、病が長引いて中陽が盛んでなくなると、脾が虚して水穀を受け入れることができなくなり、また水穀の精微が気血を化生することができなくなる。その結果、寒濁が中焦を阻んで嘔吐を引き起こすか、あるいは凝集して痰飲を生じて胃中に停滞し、飲邪が上逆するときに、嘔吐が起こる。また胃陰不足によって胃が潤降を失うと、嘔吐が起こる。『証治匯補』嘔吐篇の中に「陰虚で嘔が起こるのは、胃家の病だけでなく、いわゆる『陰がなくなれば嘔が起こる』のである」と述べられているとおりである。

総じて外感六淫・内傷七情・飲食不節・勞倦過度があると胃気が上逆して嘔吐が起こる。この場合病因の違いや体質の差により、臨床では虚実の区別が生じる。実証は邪気の侵襲によって起こり、虚証は胃が虚して下降できなくなると発症する。虚証はさらに陰虚と陽虚の区別がある。『景岳全書』嘔吐篇には、「急激に寒涼の邪を受ける、暴飲暴食、胃火の上衝、肝気の逆行、痰飲水気の胸中への凝集、表邪が裏に伝わって少陽と陽明の間に集まる、などの状況下ではみな嘔証が起こる。これらはすべて実邪による嘔証である。いわゆる虚証とは、もともと

内傷がなく、また外感もないのに、いつも嘔吐がある場合であるが、これは邪気がないのであれば、胃虚によるものであろう」という記述がある。

類証鑑別

嘔吐・反胃・呃逆の三者はいずれも胃部の病変である。ただ嘔吐は、吐物があり吐くときに声が出るという特徴がある。反胃は、朝食べたものを夜になって吐くという特徴がある。また呃逆は古くは「噦」ともいって、喉の間からヒック、ヒックという音が立て続けに出て、自分ではコントロールできないという特徴がある。

病位は、嘔吐と反胃が胃であり、呃逆は喉である。病機はいずれも胃気上逆であるが、呃逆はさらに隔間の不利という要因が存在する。

このように臨床ではそれぞれ異なる特徴があり、区別することはそれほど難しくはない。

弁証論治

嘔吐の証は、虚実を詳細に弁別する必要がある。実証は外邪や飲食によって損傷を受けた場合が多く、発病は比較的急で、病程は短い。虚証は脾胃の運化機能の衰退による場合が多く、発病は緩慢で、病程は比較的長い。『景岳全書』を見ると、嘔吐を虚・実の二つに分けて弁証論治を行っている。実証は、邪気が胃を犯し、濁気が上逆することによって発症する。治療は祛邪化濁・和胃降逆を行う。虚証は、中陽不振、あるいは胃陰不足により、胃の和降の作用が失調して発症する。治療は扶正を主にして、温中健胃または滋養胃陰を行う。

【実証】

① 外邪犯胃

症 状 突然に嘔吐する・発熱悪寒・頭や身体の疼痛・胸～心窩部の満悶感を伴う・舌苔白膩・脈濡緩。

証候分析 外部から風寒の邪や夏の暑湿穢濁の気を受けて、胃腑が擾わされると、濁気が上逆し、突然に嘔吐が起こる。邪気が肌表に侵入し、營衛が失調すると、発熱悪寒・頭や身体疼痛が起こる。湿濁が中焦を阻んで気機不利をきたすと胸脘部に満悶感が生じる。舌苔白膩・脈濡緩はみな湿濁蘊阻の表れである。臨床上的特徴は、突然の嘔吐・頭や身体疼痛・悪寒発熱である。

治 法 疏邪解表・芳香化濁

方 薬 主として藿香正气散。

本処方中の藿香・紫蘇・厚朴は主に疏邪化濁に働き、佐薬として半夏・陳皮・茯苓・大腹皮などを用いることによって降逆和胃をはかる。もし宿滞・胸悶腹脹が同時にみられるときは、白朮・甘草・大棗を除き、神麴・鶏内金を加えることによって積滯を除く。もし表邪が重く、悪寒・発熱・無汗がみられるときは、防風・荊芥の類を加えて祛風解表をはかる。夏に暑湿の邪を感受することによって、嘔吐とともに心煩口渴があるときは、本方より香燥甘温の薬を去り、黄連・佩蘭・荷葉の類を加えて清暑解熱をはかる。もし穢濁の気を感じて急に嘔吐が起こったときは、まず先に玉枢丹を飲んで關濁止嘔をはかるとよい。

② 飲食停滞

症 状 酸腐臭のある嘔吐・心窩～腹部の脹満感・げっぷ・食べものの臭いを嫌う・食べると症状が悪化し、吐き出すと爽快になる・大便が臭い、または泥状で薄い、もしくは便秘・舌厚膩・脈滑実。

証候分析 食滯内阻により、濁気が上逆して、酸腐臭のあるものを嘔吐する。昇降や伝導が失調することにより、大便が正常でなくなる。食べたものが中焦に停滞して気機不利をきたすために、心窩～腹部が脹満し、げっぷが発生し、食べものの臭いを嫌う。舌苔厚膩・脈滑実は食滯内停の表れである。

本病の臨床上的特徴は、酸腐臭のある嘔吐・

げっぷ・食べものにおいを嫌うという点である。

治 法 消食化滯・和胃降逆

方 薬 主として保和丸。

本処方中の神麴・山楂子・萊菔子・茯苓は消食和胃に、陳皮・半夏は理氣降逆に、連翹は中焦に積滯する伏熱を清する。もし積滯が比較的多く、腹満便秘があるときは、小承氣湯を併用して導滯通腑をはかり、濁気を下降させれば嘔吐は止む。もし胃中の積熱の上衝により、食べ終わるとすぐに吐出し、口臭や口渴があり、舌苔黄・脈数であるときは、竹茹湯を用いて清胃降逆をはかる。

③ 痰飲内阻

症 状 薄い痰涎を吐くことが多い、胃脘部が苦しくて食べられない、めまい・心悸・舌苔白膩・脈滑。

証候分析 脾の運化が衰えて痰飲が停滞し、胃気が下降できなくなるために、心窩部が苦しくて食べられず、薄い痰涎を嘔吐する。水飲が上部を犯すために、清陽の気がめぐらなくなってめまいが起こる。水気が心を犯すので心悸が起こる。舌苔白膩・脈滑は痰飲内停の表れである。臨床上的特徴は、薄い痰涎を嘔吐し、めまい・心悸がみられる点である。

治 法 温化痰飲・和胃降逆

方 薬 小半夏湯合苓桂朮甘湯加減。

前者は半夏・生姜で和胃降逆をはかり、後者は茯苓・桂枝・白朮で健脾燥湿・温化痰飲をはかる。もし薄い痰涎を多く吐くときは、牽牛子・白芥子各2gを細末にしてカプセルに詰め、1日3回に分けて服用すれば、化痰蠲飲の効果を増強することができる。もし痰鬱化熱となり胃を壅阻して和降の作用が失われると、めまい・心悸・眠りが浅い・悪心嘔吐などが現れる。この場合には温胆湯を用いて清胆和胃・除痰止嘔をはかるとよい。

④ 肝気犯胃

症 状 嘔吐・胃酸がこみ上がる・げっぷ

が頻繁に出る・胸脇部の悶痛・舌辺紅・苔薄膩・脈弦。

証候分析 肝気が暢やかにめぐらず横逆して胃を犯すと、胃の和降が失調して、嘔吐・胃酸がこみ上がる・頻繁にげっぷが出る・胸脇部の悶痛が起こる。舌辺紅・脈弦は氣滯肝旺の表れである。

治法 舒肝和胃・降逆止嘔

方薬 半夏厚朴湯合左金丸加減。

前者の厚朴・紫蘇は理気寛中に、半夏・生姜・茯苓は降逆和胃止嘔に働く。後者の黄連・呉茱萸は辛開苦降の効能により嘔吐を止める。もし口の苦み・胸やけや便秘が同時にみられるときは、大黃や枳実を少々加えて、通腑降濁をはかる。もし熱象がやや激しいときは、竹茹・山梔子を加えて清肝降火をはかるとよい。

【虚証】

① 脾胃虚寒

症状 食生活が不摂生であると嘔吐が起こりやすく、出たり止んだりする。顔色皸白・疲労倦怠感・口が渇くが飲みたくない・四肢が温まらない・薄い泥状便・舌質淡・脈濡弱。

証候分析 脾胃虚弱や中陽不振により水穀の腐熟と運化の機能が低下すると、食生活がやや不摂生であっただけで吐くようになり、症状が出たり止んだりする。陽虚で全身を温めることができなため、顔色皸白・四肢が温まらない・倦怠感が現れる。中焦が虚寒で、気が津液を化すことができなため、口渇があっても飲みたなくなる。脾虚で運化が失調するため、大便が薄く泥状となる。舌質淡・脈濡弱は脾陽不足の表れである。臨床上の特徴は、不摂生な食生活を送ると嘔吐が起こる・四肢の冷え・大便が薄く泥状という点である。

治法 温中健脾・和胃降逆

方薬 主として理中丸。

本処方中の人参・白朮は健脾益胃に、乾姜・甘草は甘温和中に働く。あわせて砂仁・半夏・陳皮の類を加えれば理気降逆をはかることがで

きる。もしサラサラな清水を嘔吐して止まないときは、さらに呉茱萸を加えて温中降逆をはかれば、嘔吐は止む。もし嘔吐が長引いて肝腎がともに虚し、気が上逆するときは、来復丹を用いれば上逆は鎮まり嘔吐は止む。

② 胃陰不足

症状 嘔吐が反復して起こる・ときに乾嘔がある・口やのどの乾燥・空腹感はあるが食べたくはない・舌紅津少・脈は細数が多い。

証候分析 胃熱は清さいと、胃陰が損なわれる。そのため胃は潤養されず、胃気の和降が失調するため、嘔吐が反復して起こる。ときには乾嘔が起こり、空腹感はあるが食べたくはない。津液がめぐらないため、口やのどが乾燥する。舌紅津少・脈細数は津液耗傷・虚中有熱の表れである。臨床上の特徴は乾嘔・口やのどの乾燥・舌紅津少という点である。

治法 滋養胃陰・降逆止嘔

方薬 主として麦門冬湯。

本処方中の人参・麦門冬・粳米・甘草などは滋養胃陰に、半夏は降逆止嘔に働く。もし津液の損傷が激しいときは、半夏を軽めに用いるほうがよい。さらに石斛・天花粉・知母・竹茹の類を加えれば生津養胃をはかることができる。

結語

以上を総合すると、嘔吐は虚証と実証の二つに分類することができる。一般的には、嘔吐が急激に起こったときは邪実に属することが多く、治療は主に祛邪を行う。もし外邪犯胃の場合には、必ず表証が同時に現れる。また飲食が停滞したために起こる場合には、嘔吐とともに心窩～腹部の脹満、食べものにおいを嫌う・腐臭のあるげっぷ・胃酸がこみ上がるという症状が現れる。肝気犯胃の場合には、嘔吐とともに脹満が脇腹部にまで及び、痰飲内阻の場合には薄い痰涎を嘔吐する。嘔吐が長引く場合には正虚に属することが多く、治療は主に扶正を行

う。脾胃陽虚で嘔吐が起こる場合には、疲労倦怠感があり、四肢が冷え、泥状便になる。胃陰不足の場合には、乾嘔・口やのどの乾燥が現れる。正虚による嘔吐は、病後に起こることが多く、発作が反復したり、不摂生な食生活や少しの疲労ですぐに発症する。もし病が遷延して長引いたときは、水穀の精微の吸収に影響を及ぼして化源が不足するため、病は悪化する。したがって治療は機を逸せずに行い、患者の回復をはかるようにしなければならない。

文献摘要

『金匱要略』嘔吐噦下利病篇「諸嘔吐、穀不得下者、小半夏湯主之」

『外台秘要』許仁則療嘔吐篇「嘔吐病有兩種、一者積熱在胃、嘔逆不下食、一者積冷在胃、亦嘔逆不下食。二事正反、須細察之、必其食飲寢處將息傷熱、又素無冷病、年壯力強、膚肉充滿、此則是積熱在胃、致此嘔逆。如將息食飲寢處不熱、又素有冷病、年衰力弱、膚肉瘦悴、此則積冷在胃、生此嘔逆。若是積冷嘔逆經久、急須救之、不爾甚成反胃病」

『濟生方』嘔吐翻胃噎膈「若脾胃無所傷、則無嘔吐之患。其或飲食失節、温涼不調、或喜餐腥膾酪酪、或食生冷肥膩、露臥濕處、當風取涼、動擾於胃。胃既病矣、則脾家停滯、清濁

不分、中焦為之痞塞、遂成嘔吐之患焉……又如憂思傷感、宿寒在胃、中脘伏痰、胃受邪熱、瘀血停蓄、并能令人嘔吐」

『景岳全書』嘔吐篇「嘔吐一証、最当詳弁虚实、実者有邪、去其邪則愈；虚者無邪、則全由胃氣之虚也。所謂邪実者、或暴傷飲食、或因胃火上衝、或因肝氣内逆、或以痰飲水氣聚於胸中、或以表邪伝裏、聚於少陽、陽明之間、皆有嘔証、此皆嘔之実邪也。所謂虚者、或其本無内傷、又無外感、而常為嘔吐者、此既無邪、必胃虚也。或微遇寒、或微遇勞、或遇飲食稍有不調、或肝氣微逆。即為嘔吐者、総胃虚也」

『臨証指南医案』嘔吐篇（華岫雲按）「今觀先生之治法、以泄肝安胃為綱領。用藥以苦辛為主、以酸佐之、如肝犯胃而胃陽不衰有火者、泄肝則用芩・連・棟之苦寒。如胃陽衰者、稍減苦寒、用苦辛酸熱。此大旨也、若肝陰胃汁皆虚、肝風擾胃嘔吐者、則以柔劑滋液養胃、熄風鎮逆。若胃陽虚、濁陰上逆者、用辛熱通之、微佐苦降、若但中陽虚、而肝木不甚亢者、專理胃陽、或稍佐椒梅。若因嘔傷、寒鬱化熱、劫灼胃津、則用温胆湯加減。若久嘔延及肝腎皆虚、衝氣上逆者。用温通柔潤之補下焦主治。若熱邪内結、則用瀉心法。若肝火衝逆傷肺、則用養金制木、滋水制火」